

# 江戸時代の結婚習俗とそのビジネス性

今井重男

1. 緒言
2. 江戸時代の結婚習俗とそのビジネス性に関する探索方法
3. 江戸時代の結婚習俗とビジネス性
  - 3.1 生業としての仲人業
    - (1) 仲人の関与の始まり
    - (2) 異業種の仲人業参入
  - 3.2 茶屋での見合いと見初め・見初められることの含意
    - (1) 江戸の二大盛り場・浅草と両国の茶屋での見合い
    - (2) 見合いを通じて見初め・見初められる
  - 3.3 指南書と草紙が説く結婚
    - (1) 婚礼指南書に描かれた結婚の情景
    - (2) 華美な結婚に対する諫言
4. 結言

## 1. 緒言

人生の行路は儀礼や儀式に満ちている。儀礼や儀式のうち、最も盛大に行われることが多いのが「婚礼」と言えよう。婚礼は結婚に関する儀礼・儀式<sup>(1)</sup>を指した語である。家によっては、莫大な費用を惜しげもなくかけてこれを行う。婚礼がその他と比べて特に豪華を競うのは、夫婦となる男女をとりまく近親者を含めた縁組となるのみならず、対外的な社交上においても利益不利益があるからである。

現代のわが国で普及する結婚は、概括を不可能にするほど多種多様な様相を呈していると言っても過言ではないだろう。われわれは、それを1つひとつ解きほぐして、産業としての結婚(=ブライダル産業)の全容を解題したいと考えている。その試みとして今井(2014)は、わが国の古代から室町時代までの婚礼や男女が結びつくという意味での結婚に関するフォークロアを史的に追いかけ、どの時代に、何がきっかけとなりそれらがビジネスとして勃興していくのか考証した。そこでは、室町時代に確立を見た礼道と、それに伴う結婚

---

(1) 本研究では、石井・松本・今井(2014)の規定に準拠し、挙式、披露宴などに直接関係する分野を婚礼(ウエディング)とし、仲人の斡旋、見合い、結納、結婚・婚礼解説書などの関連する分野をまとめて結婚(ブライダル)と呼ぶ。「産業」、「市場」をつけて用いた場合も対象範囲は変わらない。また、儀式は一定の作法や形式をもって執り行われる行事のこと、儀礼は慣習で整形された礼法や宗教によって一定の形式で行われる行為と解釈する。

の礼法の成立によって版行された、結婚(ブライダル)あるいは婚礼(ウエディング)を解説指南する書をブライダル・ビジネスの濫觴と目した。

前掲の論攷において、各種関連資料の渉獵を通じて室町時代以降の結婚習俗やブライダル・ビジネスの具体的内容について相当量の知見が得られた。とりわけ、印刷技術の発達が著しい江戸時代は、浮世絵、日記、絵(画)本、草紙、川柳(雑俳)、婚礼指南書類など数多くの史料(資料)を手にする機会に恵まれた。こうした史料は、江戸および大坂が舞台であることが多く、また極端な例を面白がって記述したものもあるとの理由から、時代の実態の一面に迫ることしかできないだろう。しかし、こうした事情を踏まえても実態をかすめた内容であることは間違いなく、何よりも武家のみならず市井のそれが表現されていると考えられよう。一定の社会層は、一定の社会的あるいは経済的状况で営むがために、その社会層の行動特性は社会経済的地位によってある程度まで決定されるだろう。そうであれば、これらの史料を詳細に見ることで、その時代の状況は大掴みに理解できるはずである。本稿ではこうした認識の基、結婚の象徴的な情景を描き出した絵(画)本、庶民感覚を巧みに織り込んだ草紙、即生活的で面白おかしく読んだ川柳(雑俳)、婚礼次第を詳細に綴った婚礼指南書類などを交錯させながら、江戸時代の結婚習俗の幾つかを研究する。その上で、それらにビジネス性が認められるのかどうか、あるいはそれが現代のブライダル・ビジネスに通じるものであるのかどうか見当をつけたい。

## 2. 江戸時代の結婚習俗とそのビジネス性に関する探索方法

わが国のブライダル・ビジネスの市場規模は2.6兆円<sup>(2)</sup>といわれる巨大マーケットである。結婚式や披露宴・披露パーティーを行う式場が全国各地に存在し、それを中心にさまざまな業種が連携しながらブライダル・ビジネスが展開されている。こうした巨大なマーケット解明したいと「ブライダル」、「結婚式」をキーワードに文献検索をすると、経済誌や業界誌の業界動向を占う記事と業界人(経営者)インタビューばかりで、アカデミックな論述が少ないことが分かる<sup>(3)</sup>。また、江戸時代の婚礼習俗については、歴史学では長島(2011)が、歴史人口学は黒須(2012)、古くなるが民俗学分野で高群(1963)、風俗史の江馬(1971)などが散見される。本稿でも、長島(2011)を見合いと仲人業を探る参考としたほか、江馬(1971)を結婚に関する儀式・儀礼の拠り所としている。

また、森下(1992)は江戸時代の結婚の様子を、気質物や川柳、婚礼式指南書、草紙、女子用往来物などに注目して解説している。森下は、一貫して“嫁入”を中心に据えて論じており、したがってそのビジネスの側面からの論攷はほとんどなされていない。そこで本稿は、森下(1992)で取り上げられた各種史料を、現代のわが国のブライダル・ビジネスに通じるものであるかどうかといった視点で読み直すことを行った。

(2) 榎矢野経済研究所の2014年調査結果によれば、挙式・披露宴・披露パーティー、新居の家具、新婚旅行市場、ブライダルジュエリー、結納・結納品市場、結婚情報サービス・仲介業・情報誌市場などからなる市場規模を2兆6170億円と推計している。

(3) ブライダル・ビジネスは、関連分野のすそ野が広く、全体を一通り鳥瞰しなければ何らかの示唆を得にくい手間のかかるテーマと言える。また、本稿でも論じられるように歴史の過程で様々な儀礼・儀式が生じ廃れることなどの論攷の複雑さもある。こうした原因が先行研究の少なさに影響していると考えられる。

前章で取り上げた絵(画)本、草紙、婚礼指南書類で読む当時の結婚は、仲人による斡旋⇒見合い⇒言い入れ(結納)⇒衣装の準備⇒道具入れ⇒嫁入り行列⇒婚礼…といった順で行われていたことが分かる。仲人による斡旋とは、謝金を受け取る仲人業による結婚相手紹介である。活動内容を見ると現代の結婚紹介業やブライダル・プランナーのような存在であったらしい。一方、江戸時代の見合いは、見合いを通じて“見初める”、“見初められる”という偶然性を模している点などに特徴が見られ、その演出のために方法や場所も趣向が凝らされたものとなっていた。ところで、「ゼクシィ結婚トレンド調査2014-首都圏」によれば、「仲人」をたてる結婚は0.9%、出会いのきっかけが「見合い」の結婚は0.7%にとどまる。仲人や見合いは、儀礼・儀式の省略・簡便化、代替などの様々な変化によって最早消滅しそうである。次章第一節・二節では、現代の結婚では消滅の瀬戸際にある仲人と見合いについて、江戸時代の人々の目交いに現れた事象を素描し、当時の結婚習俗とそれらのビジネス性について論じる。

諸事複雑で面倒なのが婚礼に関する儀礼・儀式である。このことは現代も江戸時代も同様であった。そして、それらの儀礼・儀式の方法、諸準備等を丁寧に解説してくれたのが婚礼指南書である。室町時代は武家の礼法の一部として、婚礼に関する儀礼・儀式が指南書に取り上げられていた(今井, 2014: 350-351)。それが江戸時代には、婚礼指南の専門書として版行される。江戸時代は多くの指南書が版行されたが、次章の第三節では『婚礼式仕様罌粟袋』、『新版後篇 嫁入談合柱』、『家礼婚礼世継草』の3書を観察し、特に庶民向け婚礼を指南する書という側面からビジネス性を辿ろうと思う。

以上、江戸時代の主に婚礼前までの結婚習俗と指南書に見る庶民の婚礼を追うとともに、ビジネスの視点でそれらを捉え考察する。そして、現時点の及ぶ限りにおいて見つけられていない江戸時代の結婚習俗に関するビジネスの論文として拙稿を草して、広く御教示を仰ぎたいと願う次第である。

### 3. 江戸時代の結婚習俗とビジネス性

室町時代末期から100年以上続いた群雄割拠の時代は、織豊両氏の覇業によって鎮まらぬかに見えた。しかし実質的な収束は、織田信長と同盟し、豊臣秀吉と対立・臣従した徳川家康が、関ヶ原の戦いで豊臣方に勝ち、日本全国を支配する体制を確立することで達成した。家康は1603(慶長8)年に征夷大将軍に補せられ、江戸幕府を開き大政を総攬するとともに、全国に300諸侯を配置して封建制を定め、武士に対して斬捨御免などの特権を与え民衆を制圧した。但し、一括りに民衆と言っても、商工業者の中には少なからず富豪も出て、才のある者は一攫千金の富を握り奢侈を極めた。それに対して、その数が最も多い農民は、全国の山野に棲み貧しい生活を送った。こうした身分・階級社会において、それぞれの社会層で、それぞれ異なった結婚が見られた。本章では、特に武家以外の江戸時代の結婚に関して、はじめにこの時代に目立ってきた仲人を、次に見合いに込められた意味を、そして最後に細やかな婚礼次第に詳細な説明を施した婚礼指南書を、それぞれ考察していく。

### 3.1 生業としての仲人業

#### (1) 仲人の関与の始まり

江戸時代の結婚で目立って多くなってきたのが、生業として結婚媒介をする「仲人」の登場であった。仲人が知っている結婚適齢の男子女子を相手に紹介し、仲人1人あるいは夫婦で縁をとりもった。見合いの段取りから、事が進めば結納、衣装等の準備、婚礼などの相談から手配まで、両家を往来しつつうまく進行させた。これらは、通婚圏が狭い範囲に収まる農村ではあまり必要な機能ではなく、むしろ雑多多様な人々が住む都市部において重要なものである。仲人の存在は、結婚に関する事務を簡便なものとして婚家双方の手間を省くが、謝金目当てで縁組させようと事実を誇張して紹介することもあり、話がもつれることもあった。図1はこうした仲人を讀んだ川柳<sup>(4)</sup>である。婚家から感謝されることもあれば、仲人の出まかせが問題となり川柳に讀まれることもあったようである。

図1 仲人を讀んだ川柳

雨 まで 誉 めて 歸 る 仲 人 （『武玉川』十六篇）	仲 人 は た と へ る 顔 に 皺 を よ せ （『武玉川』十六篇）	仲 人 の 命 限 り う そ を つ き （『武玉川』十四篇）	仲 人 の 口 ぐ せ に い ふ 石 の 上 （『武玉川』十一篇）	仲 人 の 及 ば ぬ 所 へ た す け 船 （『武玉川』初篇）	仲 人 の 夫 婦 わ ら ひ が 上 手 な り （『柳樽』初篇）
--	---	---	--	---	---

井原西鶴は『日本永代蔵』で「今時の仲人、頼もしづくにはあらず、その敷銀に應じて、たとえば五十貫目つけば、五貫目取事といへり。此のごとく、十分一銀出して、娼呼ぶかたへ遣しけるは、内證心もとなし。一代に一度の商事、此損取りかえしのならぬ事、よくよく念を入べし」（『日本永代蔵』卷一「世は欲の入札に仕合」）と書いている。持参金の十分の一を手数料として受け取る仲人業が起きていたのは確かであるが、“頼もしづくにはあらず”者、すなわち親切一途ではない者もいたらしい。また、近年の仲人は夫婦がそろって対応することが一般的であるのに対して、この時代は女性・男性が1人で行うことも多かった。持参金が銀二千枚付くという縁談をまとめようと、「仲人かか」と呼ばれる女性が奔走する姿の描写も見える（『日本永代蔵』卷二「怪我の冬神鳴」）。

結婚を首尾よく整えるのに有効な仲人制であったが、ビジネスとして専ら報酬目当てに活動する輩もあり、制度・存在そのものが非難あ

(4) 川柳または雑俳と言ひ、即生活的な、庶民の遊び文芸である。しかし、当時の文芸の中では量質ともにもっとも卓絶しており、それぞれの句は、その時々素直な思いを生々しく伝える。『誹風柳樽』は、1765（明和2）年に呉陵軒可有が約700余句を選抜し、星運堂・花屋久治郎と諮って冊子に仕立て刊行した。これが今日川柳界のバイブルとも謂うべく尊重せられている『柳樽』の根源である（日本名著全集刊行会、1927:p1）。『柳樽拾遺』は、『誹風柳樽』中に載せ洩らした選句中よりさらに抜録したもので、当初『古今前句集』と題して1796（寛政8）年に通油町・蔦屋重三郎から発行された。この版木を星運堂花久が譲り受け、1801（享和元）年に『柳樽拾遺』と解題して上梓した。編集方法は四季、哀別、神祇、無常、遊里、史談、故事などに分け、かつ年代順に序列したもので、蓋し部門的に川柳を類別した嚆矢である。『誹諧武玉川』は、1750（寛延3）年の初篇より1783（天明3）年の18篇まであり、初篇から第15篇までを扱った四季庵慶紀逸は、江戸座誹諧の宗匠であった二世湖十の門下生として博覧強記多芸多能をもって聞こえた者である（日本名著全集刊行会、1927:p6）。

るいは擲揄されることも少なくなかったようである。

## (2) 異業種の仲人業参入

わが国のブライダル産業は、しばしば参入障壁が低いと指摘される。さらに、結婚一連の一過程の関与から、取り扱うビジネス範囲を拡大することも一般的である。たとえば、ホテルやレストランが専用のチャペルを設け挙式に対応し、ハネムーンを取り次ぐ旅行会社が海外挙式も手配するなど、様々な業界がブライダル・ビジネスへの関わりを拡げている。

次の話は、江戸時代の豪農の当主が代々書き継いだ日記に見える、当時のブライダル・ビジネスの多角化の例である。既に江戸時代には、前述の通り結婚一連の一部の関与をきっかけに、縁談話の持ち込みから見合の仲介、最終的に婚礼一切まで仕切る者がいたのである。5年間の武家奉公<sup>(5)</sup>を終えて故郷の生麦村<sup>(6)</sup>へ帰村した関口ちゑ18歳に、江戸富沢町の古着商・山田屋惣八が縁談話を持ち込んだ。江戸時代の庶民は着物を新調することは稀で、古着を着ることは珍しいことではない。よって、当時の古着商は婚礼衣装を扱うことも多く、そうした縁で、付帯サービスのような形態でブライダル・ビジネスを拡大したのであった。古着販売と貸衣装の違いはあるが、始まりが婚礼貸衣装のワタベウエディングとよく似た業容拡大の例である。最初の縁談は破談となるが、翌年、山田屋の紹介で結婚することとなった。山田屋は話が調うと、結納の品から花嫁衣裳や道具類など婚礼用品を一通りそろえた。この時の婚礼支度金は金30両におよんだ。さらに山田屋は、両家の間に立ち結納品や婚礼支度金の受け渡し、婚礼での媒酌人(仲人)も勤めた。そして、婚礼儀式が無事に済むと、ちゑの父は山田屋へ婚礼一切の謝礼として金3両を渡したのであった(『関口日記』)。

この日記から分かるのは、婚礼一式に精通しているのは当然としても、婚家の間を行き交うに相応しい信用が備わって仲人業が成立するということである。それを裏付けるように、江戸時代には医者や僧侶が仲人を兼ねる例も多くあった。医者は様々な家へ出入りがあり多くの情報を得られるほか、各人の身体を診るので、引き合わせる相手を保証するという意味でも適任であった。当人の意志、両家の釣り合い(家格)、健康状態などを、医者という職業の信用や保証によって紡ぎ合わせ縁談をまとめたのである。医者に信用があることや、医者という役割を超えて仲人の腕を評価していることは「直した醫者を直に仲人」(『武玉川』十六篇)、「仲人にかけては至極名醫なり」(『柳樽拾遺』一篇)などの川柳からもうかがい知れよう。

ところが、医者や僧侶の仲人も信用されるばかりではなかった。承応年間(1652～1655)頃の江戸の医者・大和桂庵が、奉公や縁談の世話をしたことから、よろずの仲介や口入を行う者を桂庵(慶庵)と呼ばれるようになった。『鼠のよめ入り』4～5帳の仲人が女子の親へ縁談話をするシーン(図7)では、仲人の供が「差よりも慶庵がよい」と言っている。差、すなわち相対の結婚では謝礼が取れないので、仲人の関与があった方がよいというのである。このように、ある種茶化す対象に仲人を指す桂庵が用いられている例は、尊敬・信用に基

(5) この武家奉公は、貧しい層が家計補助目的に武家や商家で働く奉公とは異なり、経済的に豊かな家が、金品を支払ってでも行う類のものである。数年の奉公を経て礼儀作法はもとより、華道・茶道・書道・香道・舞踊・音曲などを修得した。

(6) 現在の横浜市鶴見区。

づく存在だけではなかったことを示唆する。それは“桂庵口”の意味が「双方に気に入るよ  
うに言葉巧みに言うこと」であることから理解されよう。

もう1つ兼業の仲人に関する奇談を『世間仲人氣質』<sup>(7)</sup>から紹介する。都市で活動する仲  
人が都市に翻弄される話である。“濡れ手で粟”の引き合いから始まるこの物語は、京都・  
上京辺りの有徳な銀貸し金子氏の惣領息子の嫁さがしに多数の人々が関与しながら進んで  
いく。この縁談話に執心した竹谷町通古手商いの佐平次は、成立に腐心して200日を過ぎ  
て「志いてたれが頼みもせぬに気を遣ひ。志やりむり十月中に聞出し霜月の朔日には頼の  
志るしを納め。廿八日の天しや日に婚禮を調べて。廿九日は禮金樽肴をもらわねば行大卅  
日の拂いの間に合わね」として、一見(本来の)商売をするそぶり得意先を回るものの、  
実は血眼で花嫁を探し回った。そこに松原通の傘屋から「十七に成るきりようよしの娘御  
をいづれぞ筋目のよい所へ嫁入させたきとの事なるが」と聞き、話の出所の後家祖母<sup>ぼぼ</sup>のも  
とへ「勇にいさんで飛ぶが如く」赴く。すると後家祖母は、「此四五丁西の熊手搔庵様とい  
う鍼立どののおたのみ。きのふも見たがまだ極まったこともないとのこと」と言い、後家  
祖母が一走りして話をつけることとなった。ところが搔庵は、これも頼まれ口であると言  
う。搔庵は「則此二丁下の町の古道具やの市兵衛に頼まれたが。あそこの内儀のむかし奉  
公してゐた旦那の所と見へる。手紙つかわし是をよびませう」と話す。やがてやってきた  
古道具屋は、女房が親里で聞いたことなので「急に宿へかへり内の者をたずねにつかはし。  
こなたへ御返事致しませう」と言った。ところが女房が親里に尋ねたところ「又だのまれ。  
里の横丁にあるかごの親方権兵衛と云わろが。私が母に此縁組を頼で置かれましたげにご  
ざりますよし」と話すので、その権兵衛に会うと「此方の得意方今はのり物にもものられる  
去御醫者様の方より頼んで来た縁談」というのであったが、この“去御醫者”は実は先に登  
場した鍼立で、縁談話が振出しに戻ってしまう。結局、十七の器量良しは見つからないば  
かりか、手数料目当てで仲人が動き回った京都の街で、縁談話が勝手に駆けただけであ  
った(『世間仲人氣質』巻之一「第二 二百九十八番と印の見える傘、身上よしのちらし札冬  
中に取組を大かたに仕おほせた風呂敷の中はなに」)。

以上、江戸時代の都市の結婚に有用な仲人であり、生業(ビジネス)としても成立してい  
たのであるが、彼らの周辺では虚実が常に緋交ぜとなって漂っていた。仲人は、専業・  
兼業の別なく、情報を駆使して動く商売であり資本などは不要であるが、口八丁で世は渡  
れない決して楽なビジネスではなかったと推察される。

### 3.2 茶屋での見合いと見初め・見初められることの含意

#### (1) 江戸の二大盛り場・浅草と両国の茶屋での見合い

わが国の結婚史上の大きな変化として、婿入りが嫁入りの形式となったのは鎌倉時代  
である(今井, 2014)。嫁入りは武家の台頭による婿の地位的向上がその主因とされる。当時  
の結婚は、結婚当事者の合意が前提ではなく、家と家との繋がりという要素が色濃かった。

(7) 「氣質物」は、江戸時代中期に流行した浮世草子を、コストダウンして大衆化させた読み物である(西島, 1973: 41-42)。作中人物達の性格が中心テーマとなる特徴がある。『世間仲人氣質』は永井堂亀友が1776(安永5)年に著した5巻10篇の氣質物。序には「(略)婚禮に媒<sup>なかつち</sup>なふしては妻と云れずとあれば只生質<sup>ただせいしつ</sup>の美にして己より能程の人を好となんいつしか是を仲人宵の程といふ世の諺に成しはいと口惜しからんと思ふより此五巻を綴て(略)」とあり、本来の仲人の働きが一部の者によって曲げて解釈されていることを残念がり綴ったとある。

それゆえに、婚礼の日に初めて相手に会うということもあった。それが江戸時代となると、庶民の間で、婚前に相手の顔を見せる見合いの習俗が生れた(石井, 2005 : 95)。江戸時代の見合いは、当人同士が会う機会と結婚相手として相応しいかどうか双方が見定める機会であった。武家は武家諸法度で「国主・城主・一万石以上ナラビニ近習・物頭ハ、私ニ婚姻ヲ結ブベカラザル事」と定められており、選択の自由が窮屈であったのに対し、女子がどれほどであったかは分からないものの、町人にはある程度の選択権があったと考えられる。

見合いが行なわれる場所は双方の意見によって定まるが、町人に人気であったのは「水茶屋」であった。水茶屋は略して「茶屋」と言われ、寺の境内、参道や花見道中に設けられた。寺社の境内などにある茶屋の多くは、ほとんどが葭簀張りの仮小屋であった。しかし、粗末な棟割長屋の茶屋と言っても居付きの建物で、奥には居間程度の部屋が設えていたという話もある。一方、街中の茶屋は立派な別座敷を設けているところもあり、寄合や商談の場所に活用されることがあった(佐藤, 1994 : 58-59)。見合いに使われたのは、前者の簡易な普請の茶屋であった。

路傍に茶釜を据えて牀を設え、葭簀で囲う茶屋の発生は室町時代の京坂に求められる。往来する人の休息所として、京都は四条河原、祇園社頭、清水寺など、大坂は難波新地、高津社、天王寺などに建っていた(佐藤, 1994 : 14)。その後、江戸幕府が導入した参勤交代制によって諸街道が整備され、大名やその供以外の旅行者も次第に自由往来の機会を得て、行路者の休憩所として茶屋が街道筋にでき、やがてそれが江戸市中へ移入された。江戸で最も茶屋が多かったのは東海道の入り口である品川で、品川以外では、浅草寺境外、湯島天神社頭、神田明神社頭、回向院境内(両国橋東)、両国橋西、芝神明社頭に存在した

図2 仁王門前での見合い風景

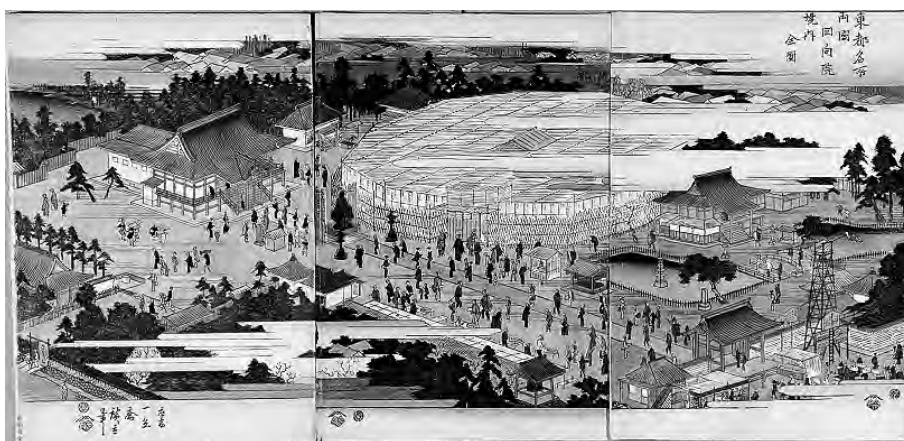


出所：『鼠のよめ入り』

(海野, 1995: 177)。江戸で見合いを行う茶屋として史料に見えるのは浅草寺二十軒茶屋と両国の茶屋である。画本『鼠のよめ入り』が浅草寺の仲見世を抜けた仁王門の前(図2), 『千秋楽鼠之姫入』は見世物で賑った回向院門前を取り上げている。

浅草観音は628(推古天皇36)年に3人の兄弟の漁師が海中から発見し祀ったことに始まると言われる。古寺名刹であったが時代とともに荒廃してしまう。それが、入府時に徳川家康が浅草寺を祈禱所として選んだのを機に、隅田川と当時周辺にあった幾つかの池を埋め立て造成したのであった。その浅草に茶屋ができたのは、宝永または正徳年間と言われる。時代とともに茶屋の数は変化するが、宝暦・明和(1772年)以後、二十軒茶屋の俚称が生れた(佐藤, 1994: 46-47)。浅草に茶屋が増えたきっかけは、観世音開帳、観音市、吉原の設置などと想像され、特に江戸文学が取り上げる浅草の市は、盛り場や人ごみの代名詞と言えるほどである<sup>(8)</sup>。一方、江戸の盛り場として最も繁昌したのは両国橋の東西の広小路であった。両国は1658(万治2)年に、大川(隅田川)に両国橋(当初は大橋)が架かったのをきっかけに、東西橋詰の広小路に繁華街が形成され発展し始める。この橋は、民暦の大火の際、浅草見附がつまり多くの死者を出した教訓から防災の意味で架けられた。東橋詰の広小路は、交通路にある盛り場であるだけでなく回向院門前(図3)という一面も有した。回向院は明暦の大火で亡くなった無縁の人々を葬った塚に建立された。この回向院は、出開帳の場所として賑いはじめ、それが呼び水となり宮地芝居や勧進相撲の興行地としても隆盛する。出開帳とは秘仏を公開する開帳を出張してすることである。幕府からの援助が少なく財政的に厳しい地方の寺社が、金集めの手段として江戸にやってきて出開帳を行った(比留間, 1980: 23-26)。回向院は、どの宗派も受け入れたこと、川筋で交通至便であったこと、納涼の時期の出が良かったことなどから、出開帳で最も好まれた会場となる。そして、出開帳時には江戸の人々はもちろん、諸国から出てきた人々もこぞって回向院を参詣し、またそうした参詣客を目当てに回向院門前では前述の古典芸能や相撲、見世

図3 両国回向院境内全景



出所：『両国回向院境内全図』二代広重(嘉永年間)

(8) 江戸初期の浅草の賑わいに関する資料を確認できていない。しかし、中期以降であれば、たとえば、平賀源内『根南志具佐』や斎藤月岑『東都歳時記』などに詳しい描写がある。



物と言った興業も盛んに催された。

川柳でも見合い場所として茶屋を設定する句が多く読める。しかも、「水茶屋を二軒塞げて見つ見せつ」(『柳樽』五篇)のように、複数の茶屋が建つ場所を想起させる句が多く、当時の趣向が良く理解できる。その理由は、茶屋が一軒しかなければ、男女の座る床几が近すぎて見合いに差し障りがあり、数軒が密集することで双方がそれとなく相手を観察できる便宜があったからであろう。そして、予め仕組まれた見合いであっても、江戸の二大盛り場であり多くの茶屋が建つ浅草寺門前と両国回向院門前の茶屋は、前者が観音詣でのついでに、あるいは後者が開帳参詣の帰途に、偶然茶屋で休息したのが縁で出会う演出をする場所であった。

## (2) 見合いを通じて見初め・見初められる

上方の画本である『祝言狐のむこ入』は稲荷神社鳥居前で、『大島台猫の嫁入』は源氏物語の悲劇の女性、三の宮の呼称を社の名にとりなし見合いをしている。場所選定の意味合いは、前述の江戸のそれと変わらない。図4は『大島台猫の嫁入』の見合い風景であるが、当時の見合いは当人同士が向き合って行われるものでなく、男子が茶を喫している傍らを、女子が供を連れて通り過ぎるというスタイルである。当事者が会話するでなし、直視するのも避け、仲人や供の者が気を利かせて助言するセリフも読める。

こうした見合いの情景に「一目ぼれ」や「見初める」という偶然性を意識しているものもある。図5の『役者百人一衆化粧鏡』の「花嫁見合図」の画は、扇子片手のそぞろ歩く男子と、肩に桜の枝を乗せた従者と思しき2人が、被き姿の女子とその供2人とすれ違う場面が描かれる。そして女子の供の1人が、扇子の男子に「これごろうじてくださりませ」と文を差

図4 見合いの風景



出所：『大島台猫の嫁入』。「お嬢様、あの方が尊様でござりまするとさ、まことに良いお猫ぶりでお仕合せ」と供の雌猫が語っている。

図5 花嫁見合図



出所：『役者百人一衆化粧鏡』

し出す。“見合(い)図”と題されてはいるが、これは平安時代の文使い<sup>(9)</sup>のような片方の思いを伝える行動で、双方の気持ちを確認め合う類の出会いとは異なる。(仕組まれてはいるものの)すれ違いざまに思いを告白するといった行動である。また、この画には「とんとすゆきのきよみずばのような」とも記され、清水寺で文を送り交際が始まった『薄雪物語』を取り込んで表現している。『薄雪物語』は作者、出版年とも不明の仮名草子で寛永(1624年～)、寛文、延宝、貞享(～1687年)など刊記のある本が現存し、多数の再販があったことが知られている。刊記の時間差が長いことや版が重ねられており、それだけ『薄雪物語』は長年にわたり読み親しまれた。物語は、清水寺に詣でた園部衛門が、駕籠から降りた薄雪という女を見初め、後日薄雪の下女に恋文を託け始まる。以来、衛門と薄雪の恋文にやり取りとなるが、全篇ほとんどを「おとこ」、「女の返し」といった調子の往来物形式をとる仮名書小説である。「おとこ」の手紙文が切ない恋情を訴えるのに対して、「女の返し」は夫のいる身であることを告げ断るのであるが、ついに衛門は本意を遂げるといえるのである。

このように、結婚する男女の会おう見合いの場所として茶屋が機能しており、しかもそれは見初め・見初められるストーリーが仕組まれ位置づいた存在であった。こうして茶屋が果たした機能を捉えると、江戸時代の盛り場に建つ茶屋は当時のブライダル・ビジネスの1つと解釈することもできると考えられる。

(9) 文使いは後朝の文とも呼ばれ、2人が共寝した翌朝、例によって和歌を贈答することである。

### 3.3 指南書と草紙が説く結婚

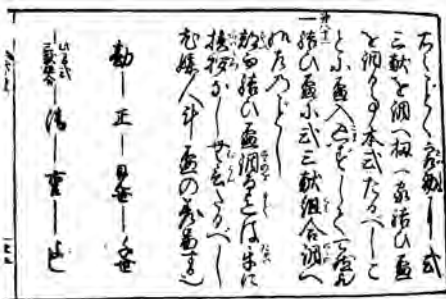
#### (1) 婚礼指南書に描かれた結婚の情景

江戸時代は、結婚あるいは婚礼指南の書籍が多く版行された。その記述は、仲人が登場して見合いを経て結納、婚礼へ至る流れを記したのものや、儀式としての婚礼作法を詳述するもの、婚礼道具を絵入りで説明するものなどさまざまで、その対象も武家と武家以外に分かれていた。『婚礼式仕様罌粟袋』は、もっぱら町民のために婚礼のあらましを綴っている(小泉,1995:1)。本書の特徴は記述が細かいことである。上巻だけでも、本文60丁に対して193項目が設けられており、項目を細分化して調べやすさに配慮している。内容は、結納・婚礼準備・婚礼道具搬入・嫁入・輿渡し・式三献・色直し・床盃・里帰り…などの、当時の婚礼のあらましを、それぞれ準備する品数・数量、立居振舞などの動作1つひとつ、部屋の座の位置や飾り付けにいたるまで細かい記述が見える。また、煩雑な説明の際は具体的な人名を使って、祝言の座敷の着座の様子や盃の順序を説明しているのも他に類例がない。たとえば賀父・丹羽勘左衛門、母・見世(みよ)、賀・清吉、嫁父・今井正右衛門、母・よし、嫁・千世などと配役し、読者が的確に理解できるように記述に配慮している。それを第八二項「結び盃三献」では、複雑な儀式を「勘-正-見世-千世-清-重-よし…」と、名前の一部を順番に記して簡便に説明している(図6-1)。一方下巻では、婚礼祝儀の返礼状の書き方や、婚礼座敷や黒厨子の飾り様などの説明が詳しく図解されている(図6-2)。

また、序文に「松に千代、竹に万台をこめ、納まり御世に今民も豊かに、あふ坂の関路こし来る春のことぶきにも、はしり出雲の神の恵みをうけ、嫁いり賀どり、相性の松に千とせの花咲きて、みどりの色も常盤にぞ云々」とあり、当時は珍しい、神々が出雲で縁結びの相談をするという信仰の存在を示唆する表現も見られる。詳しい論述は別稿に譲るが、明治の近代に神前結婚式が創造されたとする通説に異見を唱えるきっかけとなる可能性を秘めた記述である。

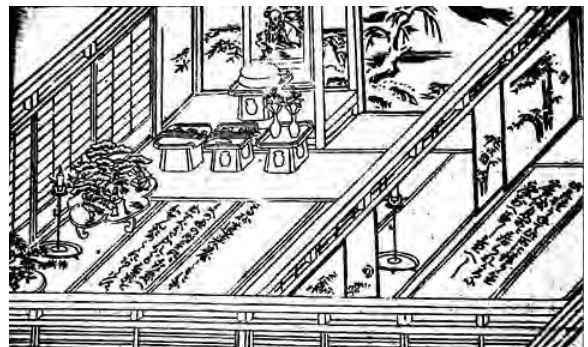
このように非常に利便性に優れた書であることは事実だが、本書の婚礼儀式は京都の富裕層の儀式で、本書の記載をもって当時の婚礼を一様に論ずることはできない。しかし、「少なくとも明治維新までの間に本書を超える婚礼指南書は登場していない」(小泉,1994:3)との指摘もあるように、本書を1つの目安として読者の実情に合わせて婚礼が営まれたことは想像に難くない。すなわち京都の富裕層のそれであることを差し引いても、婚礼実

図6-1 第八二項「結び盃三献」



出所：『婚礼仕様罌粟袋』

図6-2 婿家の座敷詠



出所：『婚礼仕様罌粟袋』

務を用意周到に綴った本書は、当時の庶民にとって重宝なものであったと推察される。

婚礼指南書で結納の次第を説明する記述・画を読むと、概ね描き出される場面が決まっていることに気付く。それらの結納の画に当事者は見えず、仲人、親族、または昵懇の人物を使者として頼んでいたことが分かる。結婚が決まると婿家から嫁家へ使者を立て、結婚成立のあかしとして衣装や持参金、縁起物の品々を贈るようになった。使者が目録を読みあげ、それに記された品々を婿家請取人が検分していく。ちなみに結納の品々を取りそろえる商売は、後年「結納屋」と呼ばれたブライダル・ビジネスに発展する。

婿家が用意する結納の品に対して、嫁入りの際に嫁家から婿家へ持ち込むのが持参金であった。「婚禮に親の筆筒若く成」(『武玉川』十三篇)と読めるように、相当額を持参したらしい。持参金は贈るのではなく“持参する”金であり、結婚後もその取扱いは嫁が決めることになっている。たとえ離縁になっても、嫁側に離縁の理由がない場合、持参金は返さなければならない。図7の『鼠のよめ入り』は、女子の父親が婿の筋目(家柄)や器量は申し分ないが、五百両の持参金を望まれ困っている画である。その父親に対して仲人は「五百両は御用達のねずみやで御借り御借り」と、幕府や諸大名に用品を納めたり金銭を貸し付けた御用達から、一時的に借入をしてでも縁談をまとめようと進言している。もちろん、この場合の仲人も、持参金の一割を謝礼として受取るのであり、同席した供が「五十両の主になるじゃ」と話していることから、持参金の多寡は婿家および関係者にとって重要な問題であった。

## (2) 華やかな結婚に対する諫言

江戸時代は、士農工商の身分・階級社会ともいえる。斬捨御免の特権を武士に与え、商工業者の中には富を握る者も現れたのに対して、その数が最も多い農民は、全国の山野に

図7 言い入れ(結婚申込み)場面



出所：『鼠のよめ入』

棲み貧しい生活を送った。こうした身分・階級社会において、幕府は道徳の基本に儒教を据え、足利幕府が強調した礼道を尊重し、身分に応じた生活を基本として、奢侈を戒め、勤労を督励し、家格を重んじ、長幼の序を訓えた。このことが影響し、結婚に関しても豪華さを諫めるような主張も見られるようになった。

『好色一代女』で西鶴は、「今時の縁組、すゑずゑの町人・百姓まで、うへづかたの栄花を見および聞伝へて、それぞれの分限より奢りて、衣類・諸道具、美をつくして仕付けける。これ当世の風俗、身の程知らぬぞかし。」と身分不相応の結婚習俗を憂い、「娘の親は、相応よりよろしき聲をのぞみ、むすこの親は、我より棟のたかき縁者を好み、取り結ぶより無用の外聞ばかりをつくろひ、聲のかたには俄普請、婬のかたには衣類のこしらへ、(中略)いつともなしに、目に見えずして金銀へらして、良縁に付けてより、しんしやうつぶす人、数を知らず」(『好色一代女』「巻四 身替長枕」と、婚礼の介添役となった女が嘆く調子で描いている。そしてこの物語の結論では、すべて質素に婚礼した家のみが、その後も繁栄していると説く。さらに『日本永代蔵』でも「分際より万事を花麗にするを近年の人心、よろしからず。婬取り時分のむす子ある人は、まだしき屋普請・部屋づくりして、諸道具の拵へ、下人下女を置き添えて富貴に見せかけ、婬の敷銀を望み商の手立てにする事、心根の恥かしき」と述べ、西鶴は過剰に金銭の絡む結婚を痛烈に批判した(『日本永代蔵』「巻一世は欲の入札に仕合」)。『鼠のよめ入』や西鶴は、持参金といい、華美な結婚習俗といい、いずれも結婚に金のかかることを強調、象徴している。

その後、こうした金満な結婚を諫める書も著された。『新版後篇 嫁入談合柱』は、華美となりがちな婚礼について、婚礼道具や花嫁衣裳など全般に質素と儉約の教を説いた指南書である。婚礼は万事につけ分相応に実施されるべきで、表面的な見せ掛けに陥りがちな当時婚礼を多くの例示と教訓を用いて解説する。高額な持参金や婚礼道具・衣装の贅沢を省くため、婚礼を上々・上・上の中・中・中の中・下と6ランクに分けて、それぞれの分限に応じた儀礼・儀式を模索した。主だった教訓は次の通りである。「婚礼大意之事」では、「家相続のために夫婦の縁を結ぶ」と考えられたこの時代の結婚観を前提に、たとえ富裕な者でも万事控え目にし、分限にかなった儀礼・儀式を採用するように推奨する。分限にかなうとは、六分限(ランク)のどこかに自らも分類され、その分限の上でも下でも適切でない、という意味である。「嫁・聲一生不忘事」は、莫大な費用の掛かる婚礼を実施させてくれる「親の心づくし」を忘れてはならないとして、このことを忘れなければ、夫婦和順して一生を過ごせると説いた。仲人に関しては「媒介人心得の事」の項で考えが述べられている。「唯仲人はかくさず、つつまず、正直成るぞたのもし」とあり、相手が気付きにくい癖や持病、その他の難点も含めて双方情報共有して執成すべきであると記述される。こうした心得・教訓を述べた後、婚礼の具体的内容を6ランクに分限して紹介している。結納品・嫁入り道具・嫁入当日の役割分担・饗応の献立・嫁および婿の土産物についてランクごとの数量や種類、費用など説明が施されている。子細なまでの金額の記載は、結婚する当事者に相当な費用が掛かっていることを知らしめるためであり、たとえ道具の代用があっても不服に思っはいけないとの戒めである(小泉,1995:9)

『家礼婚礼世継草』の端書には、「古来男女がむすばれることは自然御道理である。婚姻がすべての世の始まりで、婚儀の最初から正しい方法を教え伝えれば、そこで生まれる子供も方正で才知の優れた子どもとなろう。身分によっては定められた礼式があり、伊勢流

や小笠原流等がこれを伝える。しかし庶民にはこれが無く、心得違いも多い。そこで自分の家族のために筆者の師の教えを記すことにした」と、筆者の結婚道徳を強くにじませて述べている。解説は「由緒書」,「納幣」,「嫁の荷物送」,「嫁出立」,「嫁女入來」,「夫婦盃次第」,「色直し」,「舅姑見參」,「饗応」,「二日目」,「部屋盃之事」,「三日目聳入」,「四日目舅入」,「五日目里帰」の順にしたがってなされている。また、凡例部には買女との結婚(=請出し)を引き合いに悪風を正しているほか、「嫁女入來」の項で「如是夫婦対せし処を、人万世の始と云、其所以外は乍怖神代の古、陽神陰神の二尊、天の神乃命令を受請ひ、天の浮橋にて立せ給て御夫婦と成、国土を經營し御子達を産出し、天か下かを治め給ふ其物の如し」と結婚に諾再二神を関連付けて説くなど、前述の『婚礼式仕様罌粟袋』同様に近世の神前結婚式に繋がる内容の記述も見える。

以上見てきた婚礼指南書と草紙は、儀礼・儀式の形式にこだわって描出を試みたのみならず、結婚そのものに関しても喧しく意見を示している。そしてこれら指南書の構成は、現代の婚礼指南書類にも随所に引き継がれている。こうした事実からも、江戸時代の婚礼指南書が、後世のその基本を作ったと言えるのではないか。このように江戸時代に数多く版行された婚礼指南書も、わが国のブライダル・ビジネスの源流の1つであると考えられる。

#### 4. 結言

今日の結婚に至る過程は、概括が不可能なほど多種多様である。われわれは、それを解きほぐし、ブライダル産業の全容を解明したいと考えている。本稿の前に著した今井(2014)は、古代から室町時代までの結婚に関するフォークロアを史的に追いかけて、室町時代に確立を見た礼道と、それに伴う結婚の礼法の成立を機に版行された、結婚あるいは婚礼を指南する書をブライダル・ビジネスの濫觴と結論付けた。

本稿は、これまでに行った古代から近世(江戸時代)までの史料渉獵のうち、近世の浮世絵、日記、絵(画)本、草紙、川柳(雑俳)、婚礼指南書類などから得た結婚習俗について、それらをビジネスの面から捉え考えたものである。こうした史料は地域に偏りが見られたり、また極端な例を面白おかしく記述したケースもあつたりするため、実態の一面に迫ることしかできないかもしれぬ。しかし、いずれも市井の実話をかすめた内容であるとの信念をもってそれらの考察は進められた。考察を通じて確認できたことは、①江戸時代に多くなった仲人は都市の結婚に有用で生業(ビジネス)としても成立していたのであるが、口八丁で世は渡れない決して楽なビジネスではなかったこと、②結婚する男女の出会い見合いの場所として茶屋が機能し、それは見初め・見初められるストーリーが仕組まれ位置づいた存在であったこと、③結婚指南書と草紙は儀礼・儀式の形式にこだわった描出はもちろん、結婚の在り様に関しても喧しく意見を示していること、などであった。そして、生業としての仲人業はもちろん、見合いの場所選ばれた茶屋や婚礼指南書も、ビジネスと理解することが可能であるとした。しかもそれらがわれわれに教えてくれたことは、漸次時代習俗とともに消滅するものと、新陳代謝しながら現存するものが混在し、現代のブライダル産業が成立しているということでもあった。

以上をもって江戸時代の結婚習俗とそのビジネス性の考察を終わりとするが、これまで縷述したのは人々の目交いに現れた事象にとどまり、どのようなことが転轍手となり変化

をもたらずのか論ぜられていない。引き続き関連資料や史料の博搜につとめ、次稿では結婚・婚礼の形式が改まるダイナミズムを理論的に論攷したい。

### 【参考文献】

- 井原西鶴 (1686) 『好色一代女』(『井原西鶴集』①, 校注: 暉峻康隆・東明雅, 1996, 小学館)。  
井原西鶴 (1688) 『日本永代蔵』(『日本古典文学大系』48「西鶴集-下」, 1960, 岩波書店)。  
石井研士 (2005) 『結婚式 幸せを創る儀式』日本放送協会出版。  
石井裕明, 松本大吾, 今井重男 (2014) 「ウェディング・プランナーの自己開示が顧客とのインタラクションに与える影響」, 『商品開発・管理学会第22回全国大会講演・論文集』, 商品開発・管理学会, 79 - 84 頁。  
今井重男 (2014) 「近代婚礼創作とブライダル・ビジネスの源流」『千葉商大論叢』第52巻・第1号。  
『薄雪物語』(『日本古典全書「假名草子集」上』, 校注: 野田壽雄, 1960, 朝日新聞社)。  
海野弘 (1995) 『江戸の盛り場』青土社。  
江馬務 (1971) 『結婚の歴史-日本における婚礼式の形態と発展』雄山閣。  
『家礼 婚姻世継草』(『江戸時代女性文庫』62, 解題: 横山學, 1997, 大空社)。  
『婚礼式仕様罫粟袋』, 『新版後篇 嫁入談合柱』(『江戸時代女性文庫』28, 解題: 小泉吉永, 1995, 大空社)。  
斎藤月岑 (1873) 『東都歳時記』(日本名所圖會全集6, 1975, 名著普及會・復刻版)  
佐藤要人 (1994) 『江戸水茶屋風俗考』三樹書房。  
関口家日記 (『関口日記』石井光太郎・内田四方蔵, 1971, 横浜市文化財研究調査会)。  
『世間仲人氣質』(『校訂 氣質全集』, 大橋新太郎, 1895, 博文館)。  
高群逸枝 (1963) 『日本婚姻史』至文堂。  
長島淳子 (2011) 「第3章 近世-嫁入り婚と小家族の展開」(『歴史のなかの家族と結婚』, 監修: 服部早苗, 2011, 森話社)。  
西島孜哉 (1973) 「氣質物成立考」『文学史研究』第14巻, 大阪市立大学。  
日本名著全集刊行會 (1927) 『日本名著全集 江戸文芸部 川柳雜俳集』日本名著全集刊行會。  
『鼠のよめ入り』, 『大島台猫の嫁入』, 『千秋楽鼠の嫁入』, 『祝言狐のむこ入』(『近世子どもの絵本集』江戸編, 編集: 鈴木重三・木村八重子, 1985, 岩波書店)。  
平賀源内 (1763) 『根南志具佐』(『風来山人集』, 校注: 中村幸彦, 日本古典文學大系55, 1961, 岩波書店)  
比留間尚 (1980) 『江戸の開帳』吉川弘文館。  
森下みさ子 (1992) 『江戸の花嫁』中央公論社。  
矢野経済研究所 (2013) 『2014年版ブライダル産業年鑑』矢野経済研究所。  
『役者百人一衆化粧鏡』(大阪市立大学学術情報総合センター所蔵)  
リクルートブライダル総研 (2014) 『ゼクシィ結婚トレンド調査2014-首都圏』リクルートマーケティングリサーチ  
『両国回向院境内全図』(二代清重, 嘉永年間, 墨田区教育委員会すみだ郷土文化資料館所蔵)  
(2015.1.26 受稿, 2015.3.2 受理)